

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(19) 平成13年3月15日

農政・救荒シリーズ

明治の救荒書『凶荒圖録』(Q611-24)

飢饉を生き延びる術を記した救荒書は、有名なもので近世史中55種あり、19世紀前半の天保の飢饉の頃に書かれたものがその中で39種、全体の7割に及びます。17～18世紀初頭における本草学の発展により、領主にたよらず知識人が自分たちの力により、野生植物の紹介や飢饉への備えを喧伝することで、民衆への救済を考えました。しかし、同時に救荒書は天保期をピークとし、農業技術・知識のさらなる向上などにより激減してゆきます。

『凶荒圖録』(Q611-24)は明治期の救荒書です。著者の小田切春江は、尾張藩士の子として生まれ、幼名忠通、通称伝之丞といい、幼少の頃から絵画と文才とに秀でていました。尾張藩では馬廻り役につき、維新後新政府では六等官となりもっぱら製図にたずさわりました。内国絵図共進会出品作の「婦人遊戯の図」は、宮内省への献納を命ぜられています。また春江の代表作「尾張名所図絵」も価値のある資料です。

『凶荒圖録』は大別すると、一つは飢饉時の凶荒の記述と挿し絵の部分であり、もう一つは救荒・有毒両植物の紹介の部分です。救荒・有毒両植物紹介では、153種の草木を食べることのできるものとして調理法と共に紹介し、また食べてはならないもの有毒植物66種を紹介しています。飢饉時の凶荒の記述と挿し絵の部分では、多くの絵図類を手がけた春江だけあって、各短編の内容と挿し絵が見事に一致し、識字率の低い農民達にも一目でわかるように編集されています。飢饉に関する短編集19話は下表のようにまとめられます。出典表示が明確なものは8話(4割)に過ぎず、多くは各地の伝聞をまとめた話になっています。また、内容では飢饉の惨状を記したものが9話(5割)、ついで飢饉への備えを説く備荒心得と老農・農政家の責任や責務を記したものと続きます。

政府は勤勉貯蓄政策を明治18年頃から押し進めはじめます。それは江戸幕府時代のように農業経営に成功し地主化した老農による農業指導です。本書でも飢饉の惨状を説きながらも農民は収穫期に飢饉への備えも考えずに食べてしまうので、村役人は丁寧に飢饉への備えをするように教えるべきであると老農の責務や仕事を説いています。さらに「人間にして凶荒の備へを怠る八目前の欲に覆われ油断するより起るなり実は蟻蜂に対しても恥ずかしい事」と末尾を結ぶなど、江戸幕府時代の如き農民観が窺われます。このように『凶荒圖録』からは、明治政府の農業に対する勤勉貯蓄政策まで読み取ることができます。

時期分類	数	出典表示による分類	数	内容分類	数
享保期	2	出典明確	8	飢饉の惨状	9
天明期	5	伝聞と記載	2	老農の責務	3
天保期	4	出典不明確	8	慈善家の話	3
明治期	1	編著者の意図	8	備荒心得	4
時期記載無し	7				

参考資料

「日本における救荒書の成立とその淵源」白杉悦雄

『東アジアの本草と博物学の世界 上』所収(499.9/16)

『日本老農伝』(612.1/101)

『史話日本の歴史』(211.8/64)

小田切春光については『明治の名古屋人』(名古屋市教育委員会編, 当館未所蔵)を参照